
雷の兄さんと風の弟（転生）

たぬき童子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雷の兄さんと風の弟（転生）

【Nコード】

N4517P

【作者名】

たぬき童子

【あらすじ】

ネギの双子の弟に転生した主人公。

彼はこういった物語をつむぎだすのか…。

英雄の子供達を巻き込む陰謀と立派な魔法使いへの道。

目指すは英雄か？それとも魂の自由か？

壮大な物語っぽいあらすじですが、きっとそんなことはないと思います。

オレ：転生したんだ。

死んだと思ったら転生してた。

前世の記憶ってやつはないが、オレが新たに生まれた世界は漫画の世界のほうなので、

転生であっているはずだ。うん電波は受信してないはず。

漫画の世界のほうというのはオレの双子の兄がネギ・スプリングフィールドという名から判断した。

たしかませたガキがハーレム作る漫画だったように記憶している。ごめっマガ○ンは流し読みしかしてなかったんで、正直原作とかわかんねっ。

原作主人公の双子の弟だなんて、これなんてオリ主？兄のハーレム作りを邪魔してオレのハーレム作れってか？でもハーレム要因の女の子たちは観賞用としてはハイスペックだが、実際付き合うとか考えると全力で遠慮したいような痛い子ばかりじゃなかったか？（フアンの人ごめんなさい）※1

まあオレはオレで好きに生きるかゝなんて軽く考えている。なんせ魔法なんて素敵なアーツがあるしねっ！！

いやあゝ魔法いいっす！ちょー楽しいっす！オレが住んでいる村は魔法使い達の隠れ里のようなどこらしく、魔法の師匠には困らないんだよね。特に近所に住んでいるスタン爺さんってのは凄腕の魔法使いらしく村の中ではかなり発言力というか影響力をもってる人みたいで、彼には特に可愛がってもらっている。爺さんの後ろにひっついて色々魔法について教わってる毎日です。

ぶっちゃけ家族と過ごす時間より爺さんという時間のほうが多いくらいだしなあ。どんだけ爺好きよオレ（笑）。

あ、自己紹介が遅れました。オレの名前はレン・スプリングフィールド。ぴちぴちの4歳児です。

家族構成は母不明、父英雄だが行方不明、双子の兄自虐的変態、従姉の育児放棄者。

まあなんだ、なぜオレが普段スタン爺さんといるのが一目でわかるような家族構成だよな。

母親不明のうえに父のナギは英雄らしいが失踪。

兄のネギはそんな父に憧れてか自分がピンチになれば父が助けられると思ひ込み、冬の池に落ちてみたりちよつとした丘から（といっても子供にとっちゃけっこうなもんだと思う）転げ落ちてみたりと忙しい。お前はどこの自殺志願者かと。

従姉のネカネはそんなネギにつきつきり。つまりオレ放置されてるのよね。

いやーネグレクトって怖いわあ。

保護者がネカネ姉さんなんだが、オレ彼女に世話された記憶ないってどんだけよ。

近所にアーニヤとかいうウゼー幼女（彼女の方が年上です）の家族もいるんだが、基本あの幼女オレにはつかかるかネギにツンデレるかの2択なんでむしろ居ないほうがいいし、その家族もネカネがネギの面倒よく見てるのを見て、あらゝネカネちゃん頑張ってるわねえゝとオレ放置されてるの気づいてねーし。

親の遺産無し。保護者の世話無し。近所の人からの援助も無し。

無し無しづくしでなんとかオレが生活できてるのも魔法を習うっていう名目でスタン爺さんを初めとする魔法使い達の家に転がり込んでメシ食わしてもらってるからです。ローテーションも組んでるぜ。

村のやつらはオレやネギ兄さんが積極的に魔法に興味をもつことを歓迎してるみたいだ。

ことあるごとにお前達の父親は英雄なんだぞとかナギみたいな立派

な魔法使いになりなさい。なんて言ってくるのには面倒くさいけど、食わしてもらってる身だしな。基本右から左へのスルーなんだが、真面目に聞いているふりぐらいはしてやるさ。4歳児にむかって職業選択の自由を奪うってどうよ。

次は魔法についてかな。この世界の魔法ってやつは自身の持つてる魔力を使って精霊さんをお願いをする。魔力をもらった精霊さんがその願いを叶えてくれるってのが魔法のシステムみたいだ。

世の中には魔力を持っても精霊さんを認識できずに魔法を使えないような人もいるらしいが、オレにはあんま関係ない話しだな。

ネギ兄さんもそうなんだが先天的に魔力量が多いし、精霊さんとの親和性も他の人より高いみたいだ。もともと家系的に風の精霊さんとの相性がいいんだが、オレの場合特に風の精霊さんとの相性が抜群なのだ。高い資質をもつ者は複数の精霊と相性がいいらしいが、オレは複数の精霊さんとの相性を犠牲にして風の精霊さんとの一種の専属契約のようなものを結んでいるらしい。

スタン爺さんが言ってたんで間違いない。※2

ネギ兄さんはアーニヤといちゃこらしながら魔法の勉強と自殺未遂の日々をすごし、ネカネ姉さんはネギの世話。

オレはスタン爺さんなどの魔法使いに引っ付いて魔法の勉強と日々の糧を得る生活。

そんな生活に終止符が打たれたのは、とある冬の寒い寒い夜のことだった…。

一番初めに異変に気づいたのはたぶんオレじゃないかと思う。その時急に不安感というか落ち着かないような感じというか、とにかくザワザワしてイヤな感じがした。

この言葉に出来ない不快感をオレはちょうどその日の当番だったスタン爺さんになんか変だ。と伝えた。

なにをいっとるんだこの小僧は、と呆れた眼差しを向けてきたがしばらくすると外の喧騒が聞こえてきた。

外を覗いてみると異形のモノ達が村を襲っているじゃありませんか！見るからに悪魔的な？てかあれって悪魔か！？

ちょ、なんで村が襲われてるのよ。悪魔の子供をうっかり殺してしまつて、その復讐にとか？まさかそんなテンプレなことがおこるもんなのか？

こりゃいかん。逃げなきゃ！

…って逃げるまでもないか。この村には凄腕の魔法使い達が何人もいる。

火柱だしたり、リアルに雷落としたりとか見せてもらったのには素でビビったくらいだ。

問題ねえ　すぐに悪魔どもをジェノサイドしてやるぜ！…主にこの魔法使いたちがっ。

オレは非難させてもらうがな。

スタン爺さんをはじめ、魔法使い達が反撃を始める。

なにがすごいって、不意打ちをくらったのにすぐさま組織的な動きで連携を取り合い、苛烈に反撃してるんだもん。

こりゃ悪魔終わったなwオレは高みの見物でも…とそんな風に思っていた時期がオレにもありました。

一匹の悪魔の口がピカッと光ったと思ったら謎の光線が出て、次々と石像が製造されていったのです。

なんということでしょう。勇ましい魔法使い達は無残にも石にされてしまったのです。

あばばばばばば。

「む、これはいかん。爵位クラスの悪魔まで召喚されていたのか。レン、おぬしは逃げるんじゃない？」

やべえ、村一番の実力者といっても過言ではないスタン爺さんがオレに逃げろと言っている。

村終わったなwwwごめんねみんな逃げるオレを許して（涙）

みんな死なないでと健気なことを言いつつも速攻で逃げるオレの退路を周りの魔法使い達が作ってくれる。

ありがとう。みんなのことは忘れないからねっ（涙）

ネギ兄さん？ネカネ姉さん？知らんよ。誰？その人たち。オレの脳内には記録されていないな。

まずは自分の安全確保から！余裕が出来てから他の人のことを考えようぜ。

というわけでオレは逃げる。

4歳児と侮ること無かれ！戦いの歌という肉体強化の魔法を使えば子供だってアスリートに大変身。

スタン爺さんの家は村のほぼ中心地に位置する。

悪魔は村の裏門にある南から進入してきたようなので、正門のある北へと逃げる。

村は深い森に囲まれており、地元の者でないと土地勘は働かない。

悪魔に土地勘？とか疑問ではあるが、村に残ってるよりはましだと思いたい。

なんとか森に逃げ身を隠し、襲撃が終わってヤツらが帰るのを待つことが肝要なり！

撤退、戦略的撤退だー！

ちい　　村人が右往左往して正直邪魔だ。

魔法使いの隠れ里とはいえ非戦闘員の普通の人間も大勢いる。

みな危険を逃れようと悲鳴を上げて逃げ回るもんだから余計にパニックになってしまっている。

いくら魔法で体を強化しようともこうも場が混乱してたら上手いこと逃げれないじゃないかつ！

ええい邪魔だー頼むからどいてくれー（汗）

よし。この広場を抜ければ正門まであと数分。逃げ切れる！

術式にさらに魔力をこめ一気に駆け抜けようとしたその瞬間、頭にキューピンと電波的なものが走った。

このまま進むと危険、だと！？

むう さっきは悪魔が来たことの予感だっただろうから、ここは感に従ったほうがいいか？

でももうすぐ正門だしな。うう足を止めちゃったよ。

このまま進むか別のところから逃げるかを早く決めないと。

このまま足を止め続けるってのが一番の愚策だぞ。

動け動けと必死に念じるオレの心とは裏腹に体はぴくりとも動かなくなってしまうた。

ううう なんか威圧感を感じる。これが、プレッシャーってやつか！？

遠くでは村人の悲鳴とか喧騒は聞こえるのに、オレの周りでは不自然なほど静かだ。

なぜ？村人がこっちに逃げてきてないってのは絶対おかしいぞ。

考えろ。思考を止めるな。体が動かない今、考えることさえ辞めてしまったらオレは殺されてしまう。

北の方から逃げてきて来た人もいる。北の正門からわざわざ遠ざかるってことは…つまり…

「そう、我々はすでにこの村を囲んでいるのだよ。残念だが君達に逃げ場はない」

気づいた時にはもう遅かった。目の前には異形の悪魔がわらわらと沸いていた。

つーか思考を読まれた？

「その通り。サトリという私の固有スキルで君の考えていることはつつぬけさ。安心したまえ。殺しはしない。まあ石にはなってもらがね。その前に2, 3質問させてもらうがいいかね？ ああ別段答えなくてもいい。私の能力で答えはおのずと解ってしまうからね」

※3

体が震える。意識が遠くなる。このまま気を失えたらどんなに楽になるだろうか。

魔法という非日常が楽しかった。

魔法さえあれば家族にほっておかれている惨めな自分に言い訳ができた。

オレには魔法がある！ いまさら家族とも思えないようなヤツらにかまってもらわなくても、師匠であるスタン爺さんや他の魔法使い達と楽しくやってけるさ、と。

この世界の魔法には攻撃魔法というものがある。そう攻撃魔法だ。攻撃魔法なんてのは攻撃する対象があるってことが大前提だよな。魔法というファンタジーがあれば当然モンスターってファンタジーがあるのはアリだ。

モンスターってくりには悪魔ってやつはもちろんカテゴライズされちゃうよなあ。

楽しいだけだと思ってた魔法というファンタジー。

楽しいだけだと思ってた浅い考えのツケがたった今きちまったのか。いくつか攻撃魔法もみんなから習っている。でもだめだ。オレの心はもうすでに折れちゃった。

だってオレ4歳児なんだぜ？普段は家族をバカにし、世の中を斜めに見て気取っている小ずるいだけの小僧だ。

ああ、でも死ななくてすむってのだけが救いだ。石にされてもきつと誰かが戻してくれるよね？

「君はネギ・スプリングフィールド、もしくはレン・スプリングフィールドを知っているかね？私の目を見て彼らを思い浮かべて欲しい。なに、たんに考えが映像として私にも見えるだけだ。危険なことはない。素直に思いうかべさえすればこれ以上の恐怖を味わうことも無く石になれる」

は？ネギ・スプリングフィールド？レン・スプリングフィールド？なんのことを言ってるんだ？こいつ。

いや、誰のことだって？

「ふむ。君はなにも知らないのか。この村はナギ・スプリングフィールドを慕う魔法使いたちが集まり作れた町だと聞いたのだね。英雄殿の息子達を君は知らない、と。まあその歳ではしかたないのかもしれない。しかしそうなる最初の人間たちを問答無用で石化魔法で石にしてしまったのは失敗だったか…」

これは…ラッキーなのか？なんか頭が真っ白で話しについていけない

ないがこのままオレは石になれるっぽい？

オレがラッキーかも？なんて思ってるのもあの悪魔には読まれてるのがだろうが、石にされて恐怖から解放されることを喜んでると勘違いされそうな感じだし。

このまま安らかに石として生きていきます。なんて意味不明なことを考えていたらピカッと北の正門のほうからなんか光った、と思った瞬間に衝撃に襲われた。

不味い。すでに村が悪魔どもに襲われてやがる。

ネギやレン、ネカネは無事か？スタンのじーさん達がなんとか持ちこたえてくれりゃーいいんだけど。

村が襲われる、とつい先日とある情報筋から耳にしてから全速力で飛行し村に向かっている。

くそったれ！もっと早くに情報が回ってきてればこんなことにはな

らずにすんだかもしれねーのに。

いや、今は助けることだけを考えろ！もう村は目前なんだ。

村の正門に到着したとき、正門の先にある広場に何体もの悪魔の姿を確認した瞬間、プチッとキチマッタ。

「来れ雷精 風の精！！ 雷を纏いて 吹きすさべ 南洋の嵐 >
雷の暴風<！！！！」

問答無用でコレでもかとはかりに魔力を練りこんでぶっばなしてやった！

もちろん反省も自重もしてやらねー！！

悪魔どもがふざけたことしやがって！許しちゃおけねえ。

いや、落ち着けオレ。まずはネギとレンの無事を確認するのが先だ。
どこにいる？ネギ、レン…。

あつ オレ今気絶してた？なんか光ったと思ったら体中がイテエ…。
そっか石になるってこんなに痛いんだ…。全然ラッキーじゃねえよ

(涙)

うううちょーいてええ。いつの間にか悪魔いなくなってるしさー。
ラッキーなんだかラッキーじゃないんだかわかんねえし、イテエ。

※4

痛くて痛くて我慢できない。このまま森に隠れてもオレそのまま死
んじやわないか？

あ、石だから死なないか。うー痛い。スタン爺さんの家に回復用
の魔法薬まだストックあったよな？

石だけどこの痛さは尋常じゃねーぞ。回復魔法は苦手だけど魔法薬
のサポートがあればまだましだな。

魔法薬とってきて、回復魔法かけてから森に逃げて石になろう。う
ん そうしよう。

途中で悪魔にあってもオレもう石だから襲われる心配ないしな。※5

「…って、なんじやこりやあああああ！！！」

オレ石になってないし！石どころか血だらけだし。どーりで痛いはず
だよこれ。

なに？なんなの？なにがどーなってこんな風になってるの？
ってかなんでオレがこんな目にあうわけさ…。

理不尽すぎる：イライラする。むかつくし。
頭にきた。てか頭痛い。

もーヤダ。絶対にヤダし。ちょーヤダ。
決めた。今決めた。全部ふつとばす。

スタン爺さんに禁止されてるけど、今の状況は”せいめいのきけん
のあるとき”だし。その時はむしろ使うのじゃーとか言われてるし。

本^{マジ}当に突然だが魔法を行使するには魔力と精霊の感知、あとは呪文
がある。

呪文とは精霊への願い。精霊さんへあれそれこうしてくださいね、と
いうお願いの言葉なのだ。

その精霊との親和性が高かったり、本人の魔法の技量が上がってく
ると詠唱破棄といういちいち呪文を唱えずともすむ高等技術を身に
着けたりできるのだが、

風の親和性が高すぎるオレにはもはや呪文など必要としない。（風
系統の魔法にかぎるが）

思うだけで、精霊に願うだけで魔力を消費し、魔法を行使すること
が可能なのだ！

それをなぜスタン爺さんに禁止されているかというと、オレの思考
が大雑把すぎるのと、精霊もその大雑把な願いを斜め上の方で叶
えてしまうからだ。

つまり、特定の本に生えているとある枝を断ち切りたい場合に呪文
を使った魔法の射手・風の一矢ではこれこれこういった形をした風
の矢をどこそこにうちだしてください。

という風になるのだが、呪文を使わずに精霊に直に願った場合、そ
こに生えてる木の枝風で切っちゃって。

↓その木周辺に鎌鼬大量発生、周りの木ごとばっさり。

結果的には枝は切れているが、周りの被害がひどすぎるということ
に。

杖を兄さんに渡すときにオレがプツンしてダウンバーストを作ったらしく、あわれ杖は粉々になってしまいましたとさ。ごめんねネギ兄さん（涙）

蛇足でダウンバーストは悪魔の所業に切れたナギが行った攻撃魔法ということでした。

ネギ兄さんが父さんの魔法じゃないと抗議したのですが、なにぶん子供の言うことですしネギも混乱しているんだろということでした。暖かい目で見守られたらしいです。

かくしてスプリングフィールド村事変は死んだと思われていた英雄ナギの生存！の確認と魔法世界有数の癒し手たちにも治せない永久石化の呪いがかかったままの村人、という犠牲者をだしてしまった難題を残したまま幕を閉じるのでした。

※1 ロリババアとかロボとか見た目幼女sとか怪力無双とか忍者とか悪魔っ子とかとか。正直ないよねー。

※2 魔法理論？なにそれ美味しいの？

※3 いろんな悪魔がいてもいいじゃない。あとヘルマン卿の固有スキル＞永久石化くの付与効果で石化魔法ランクUPこれでパーテ

イー組んでる悪魔のみんなも永久石化効果使えるよ！

※4 魔法をある程度レジストしました！だから生きてます。きっと悪魔の石化魔法くらってもレジストしちゃってじょじょに石化だったかと。

※5 彼は混乱しています。

※6 永久石化っていうくらいですもんね。それくらいの効果があってもちつとも不思議じゃないですよね？ね？

オレ：転生したんだ。（後書き）

ほぼ衝動書きです。原作知識ない転生者が主人公。きつと自分は転生したと確信していても神にチート能力もらうとか原作知識ないんでチートオツWにはならないはず。原作主人公の双子なんで十分能力的にチートかもですが。原作沿いに進めるといいなあ。

嵐の後で

スプリングフィールド村事変より1ヶ月がたった。

魔法世界の北の連合？の偉い人が派遣した救助隊に救助されてから、石化を免れた人たちと一緒にメルディアナ魔法学校近くの町の病院に避難させられていた。

初めて知ったが、オレが住んでいたのはイギリスにあるウェールズというド田舎だったのだ！（ウェールズ住まいの方ごめんなさい）いやーびっくりだーオレ今世ではイギリス人かー。まあ魔法的なモンを隠すにはこんくらのド田舎のほうが都合がいいのかな。魔法学校近郊に町といえるほどのコミュニティは出来てるが、ほぼ全員が魔法関係者らしいしな。

2度目のびっくりは魔法学校の校長が床にふせっているスプリングフィールド家を尋ねてきて、ネギ兄さんとオレに魔法学校に入学しないか？と誘ってきたのだ。

メルディアナ魔法学校といえば西洋魔法界では名門中の名門！卒業できれば将来安泰といわれてる学校らしい。実はネカネ姉さんもこの卒業生でオレらが入学するなら教員試験を受けてメルディアナ魔法学校に就職しようかしら？なんてのんきなことを言っている。アーニヤにいたっては在校生らしい。しょっちゅう村にいなかったか？こいつ。

周りからも流石は英雄の子供達だ！名門メルディアナ魔法学校に入学推薦されるなんて！とすでに入学以外の選択肢を選ばせてくれない雰囲気だし…。※1

ネギ兄さんっ：は入る気まんまんですよー。答え聞かなくてもその顔見ればわかります。はい。

じゃーオレも入学します。食わしてくれる人みんないなくなっただ（涙）
入学料とか免除のうえに生活も面倒見てくれるって言われたらホイホイついてくしかないじゃない！

ちなみに久々にスプリングフィールド家勢ぞろいしたんだけど、ネギ兄さんはボク父さんに会ったんだ！父さんの杖ももらえそうだったのに、変な風の魔法で杖が…でも父さんはボクに会いにきてくれた！！と自慢ウゼーっす。

ネカネ姉さんは、あらレンひさびさに会ったわね。元気にしてた？（ニコツ）

って…。お前ネグレクトは確信犯なのか？確信犯だったりしちゃうのか？

ネギとは双子なだけあって瓜二つな顔してるんだけどなあ。

やっぱ夜中に一人寝が寂しいとか言ってベットにもぐりこんだりするシスコンの甘ったれじゃないと可愛がれないというのか…。あ、ちなみにこれアーニヤ情報っす。たまにネギ兄さんのことで愚痴りにくるんですが、ごめんなさい身内のそんな話し聞きたくねーわ。

※2

まー怖いことがあった後なうえに、入学式は春からなんでゆっくり養生してくれと言われて校長先生はお帰りになりました。

救助隊にはあの夜のことを根掘り葉掘り聞かれ、ネギ兄さんには永遠と自慢話聞かされ、見舞いに来たというアーニヤはやかましく騒ぎ立てるだけだし。休むに休めねえ。

病室変えて欲しいとドクターに直談判しにいくついでに、石にされ

た人たちも病院内の施設に安置されているということで様子を見て
いってみたいした。

魔法界からも癒し手と呼ばれる回復魔法のスペシャリストを招いて
石化解除を試みているようだが、結果は著しくはないみたいだ。

かなり強力な石化の呪いのようで、解呪するには相当な魔力を持っ
た癒し手が伝説級のアーティファクトを用いない限り解けないかも
しれないと見られている。

うーん スタン爺さんが石になっちゃったのは痛いなあ。

実質的なオレの保護者は爺さんだったからな。姉さんはあてにはで
きねー。

体の傷も癒え、あの夜がトラウマになってないかを綿密に検査され
て異常なしと診断されたオレは入学式前に一足先に学校の寮へ入寮
をした。

校長先生にネカネ姉さんのネグレクトっぷりを懇切丁寧に説明し、
彼女の庇護（されてねーけど）にいたら死んでしまうと涙ながらにうったえたら許可が
下りた。 いえーい w

ネギ兄さんはあの夜のことを聞かれるといまだに興奮するためまだ
退院の許可が出ていない。

どうやら常日頃からお前マゾなんじゃねーの？ ってくらい自分をピ
ンチにおいつめていた一環として悪魔が村を襲ってしまったと思い
込んでいるらしく、自分を責めているということだ。

んー オレが見る限り罪悪感より父さんに会えたっていう興奮のが
勝っているように見えるんだが、まあ専門家が言うんだから間違ひ
はないんだろうな。 うん。

一足先に入寮を果たしたオレは寮じゃちょっとした有名人になって
しまった。

やはりスプリングフィールドの家名が強いのと、悲劇的な事件の当事者が身近に越してきたら野次馬根性が出てきてしまうのはしかたない、と思う。寮にいる限り飢えはないしな。有名税として話題提供してみんなのちょっとした娯楽になるくらいは我慢しようと思う。

入学式前なんで同級生なんてのは一人もいないが、先輩になる人だけは無駄にいたので今のうちに楽な

授業をする教授の情報などを仕入れておこう。メルディアナ魔法学校がオレにとってすごしやすい日々となりますように、とあらかじめ祈っておこう。

春のうららかな晴れの日の今日、メルディアナ魔法学校の入学式です。

病み上がりのネギ兄さんより、先に学校で生活していて学校の雰囲気にも慣れているオレが新入生代表的なことをやってくれないかと校長先生から打診されたとき、ネギ兄さんの兄としてのプライド（笑）が刺激されたのか不機嫌な顔して校長先生に自分の健在っぷりをアピールしております。ネカネ姉さんとアーニヤがそこに援護射撃を追加。お前らどんだけネギ兄さんのこと好きなんだよ…。てかオレのことが嫌いなだけか？（涙）いーけどさっ べつに。

見事立派に新入生代表として壇に上がり挨拶するネギ兄さんを見て感涙しているネカネ姉さんを横目に式は肅々を進行されています。今日からオレたち、ピカピカの一年生になります！

入学してからオレたち兄弟の知名度は上がる一方だった。

かたや実技、筆記ともに首位を独走するネギ兄さん。

彼に近づけるのは上級生の中でもアーニャだけ。(てか兄さんに近づくと生徒をアーニャが撃退しているしかも男女問わずで。なんで兄さん友達いできない)あと勉強以外の雑事はさせられないとはれて教員になったネカネ姉さんが専属秘書のようにつきっきりだ。

まあ教員は姉さんだけじゃなくて他の教授たちもネギ兄さんがまさに天才的！って感じに知識を吸収しているので兄さんのことを鍛えるのが楽しいみたいだ。

オレもネギ兄さんと比べれば劣るが有名だぜ？自分でいうのもなんなんだけどさ。

筆記は：まあオレ呪文いらねーから覚える気ねーし？知らなくても全然OKだから問題じゃねー。

実技のほうは兄さんと同率首位だ。もっとも精霊とより親和性があるオレのほうの実技に関しては才能があるんじゃないかな、と思う。ネギ兄さんもそれは感じてるのか最近オレに対して嫌味を言うようになってきた。それに付随してネカネ姉さんとアーニャが攻撃的に…。オレが悪いのか？これ。

まあ家族なんてもんには期待なんぞしてないからな。せいぜいオレはオレで学園生活を楽しませてもらってるよ。学友たちとバカなことやってすげーエンジョイしてますw

優等生のネギ兄さん。実技以外はさっぱりやる気を出さないオレ。顔はそっくりだが、性格の全然似てない双子のスプリングフィールド兄弟として学校の名物となりつつあります。

メルディアナ魔法学校は7年生制度の魔法学校だ。しかも優秀であ

るならスキップが認められる。

なにが言いたいかというと、スキップしちゃったのだ。オレたち兄弟。

ネギ兄さんの優秀さは語るまでもなく、筆記壊滅なオレがスキップできたのは呪文を使用しなくても狙った効果を過不足なく魔法として行使できるようになったということが大きい。オレだって成長してるのさw大事なイメージだったんだ！いやー教授連中の悔しそうな顔と思ったら、もうたまんなかったぜ。

あ、オレと教授たち別段仲が悪いつてわけでもないんだぜ？どうしてもやる気を見せないオレと、天才児の片割れとしてやる気を見せてくれることを期待してる教授たちとの間ですさまじい攻防があったのは確かだけど、手間のかかる子ほど可愛いってのはネカネ姉さんだけじゃなかったみたいだ。しまいには教授たちも折れてきちん

と呪文を使用したのと同じ効果を出せるようになったら単位をくれるって約束をしてさ。もちろんその賭けはオレが勝ったw挫折してきちんと座学にもやる気を見せるようになって欲しいと考えてたんだらうけど、面倒なこと嫌いなんだよねーオレ。

ネギ兄さんにひつついて勉強してたアーニヤまでスキップできたのは純粹にすげーと思うけどさ、だからお前なんでそんなにオレに對して攻撃的なのよ？まじ勘弁してくれ。※3

5年もこの学校に通ってるとはなあ：なんか感慨深いもんがあるな。本当にこの学校には世話になった。飢えずに生活できるのも校長先生の援助のおかげだしな。

マジで感謝だぜ。友達と遊ぶのも教授たちからかうのも楽しいし。あー今年で卒業だなんてついてねーなあ。ちゃんと単位はとれたとはいえオレのスキップって絶対ネギ兄さんに合わせられてるよな、これ。

学校の思い出といえば、長い休みの日にはタカミチとかいう父さんの知り合いだっていうオッサンがオレたち兄弟を訪ねて遊びにきたりもした。。

日本語ムズカシーネ。あ、そのタカミチが来たときはさすがの兄さんも外で遊んだりとかしてたな。

やっぱ父さんの知り合いってのが要因なのか？

オレ？別に父さんに興味ねーし、遊ぶにしてもオッサンなんぞより同級生たちと遊んだほうが話してもあうし楽しいぜ？まあ少しは話したりしたけどさ。なーんかあのオッサンのオレを見る目が妖しいんだよなあ。ネギ兄さんを見るときは絶対に雰囲気が変わる！あれはきつとオレを狙ってる目だな。

いくらオレが美少年だからってさすがに露骨すぎるぜ。ネギ兄さんじゃなくオレってところがあのオッサンの趣味を表してるよな。活発なワンパク小僧に萌える？とかいうやつだろ？

日本のサブカルチャーって面白いのが多くて好きだけど、こういう変なのだけはかんべんなっ！

夏休みを利用して、やっとナギの息子であるネギ君とレン君に会うことができた。

ここ数年この日の休みを捻出するために教員の仕事を手伝ってもらっている瀬流彦先生には感謝してもしきれない。

ネギ君もレン君もやっぱりナギの子供だな。優秀なところは親譲りだ。

ネギ君はボクになついてくれたけど、なぜだかレン君には警戒されているのが残念だ。

うーんやっぱりネギ君よりレン君のほうがナギに似ているからつつい重ねて見てしまうのが原因かな？

二人ともナギをそのまま小さくしたような感じだけど、レン君は性格もそっくりだからなあ。

とくに呪文をさっぱり覚ええないのに強大な魔力にものを言わせて魔法を発動させてたり…。

いかんいかん！子供はただでさえ敏感なんだ。自分をちゃんと見てくれないっていうのが原因で避けられてるならちゃんとレン君を見るようにしないと駄目だな。

「タカミチー！なにしてるの？滝はこっちだよー？早く来ないとおいてっちゃうよ？」

「ハハ。ごめんごめん。今いくよネギ君」

「淹って本当に拳圧で割れるのかな？ボクいまからすごく楽しみだよっ！」

ネギ君もレン君もまだまだ無邪気な子供だ。

彼らが立派な魔法使いになれるようにボクたち大人がきちんと導いてあげないとな…。

青空が広がる穏やかな昼下がり。5年前の入学式のことを思い出す。早いものだ。もう5年もたってしまった。今日、オレたちは学校を卒業し、立派な魔法使いになるための修行地を与えられ、それぞれ

の道へと進んでいくことになる。

まあぶっちゃけオレは立派な魔法使いなんてのになる気はさらさらなく、なんか魔法使った楽で稼げる仕事なんかにつけたらいいな！なんて、人生舐めきったことを考えている。

みなまで言うな！オレだって甘い考えだってわかってるから。そもそもオレは今数えて10歳だぞ？

仕事につくのもまだまだ先の話だ。魔法の修行を行いつつ遊んで、という生活は学校生活が終わろうともまだ続いていくだろう。さすがに寮に入っていたころのようにすき放題はできなくなるだろうが。

入学式の時のように、肅々と式は進んでいく。主席卒業はもちろんネギ兄さんだ。次席がアーニャ。オレは一応3席ということになっているが、あやしいもんだ。だってオレ実技くらいしか試験うけてねーぞ？筆記は全部特例で単位とったし。うーん　これが政治の世界ってやつなのか？怖いな！。

まー　卒業しちゃうんだ。3席でもくれるっていうならもらっとくほうが徳だろうしな。気にしない。気にしない。この学校卒業にしかも3席っていうなら箔がついて上等だぜ！就職のときはきつと有利に働いてくれるに違いない（笑）

「3席卒業、レン・スプリングフィールド君！」

ん？オレかつ。

「はいっ！」

あぶねっ。赤っ恥かくとこだったぜ。

式典ってのは暇で眠くなるってのが相場だけど、自分が参加するやつなんだ。

恥だけはかかないように気をつけないとな。

「レン、お前は父親と同じようにワシらをよく困らせてくれた。…一時は父親と同じ道を歩むかと心配してたが、よく卒業まで頑張った！この頑張りは将来きつとお前の役に立ってくれることじやろう」

ウヒ、サーッセン。校長先生まで困らせてたとは。

オレにしては結構自重したほうかと…w

「オレ、校長先生や、もちろん他の教授たちにも感謝してます！いっぱい友達もできたし、最高の学校生活でしたっ」

うう校長先生をはじめ式に参加している教授のほとんどが涙ぐんでやがる。（ネカネ姉さんはネギの時には泣いてたくせに今はもうけろっとする。慣れてるけどさー）

実際に学校生活は充実してた。案の定というか家族とは修復不可能な溝が出来たような気がしないでもないけど、それをいれたとしても楽しかったな。村にいたときじゃ歳が近い子供なんてアーニャくらいだったし。ここに来てぐぐつと友達も増えた。卒業したらなかなか会えなくなるし、寂しくなるな。

式も終わってみなが修行先が浮かび上がってくる用紙を見せ合っている。

かく言うオレも今年一緒に卒業する仲のいい先輩達と修行先が浮かび上がってくるのを待っている。

「やっぱりオレは魔法世界で拳闘士とかがいいな！目指せ最強の漢ジャック・ラカン！とかw」

「ばっかwお前が拳闘士なんて修行先だったらデビュー戦で大負けして恥かくだけだって」

「ちょ、それはいくらなんでも聞き捨てならねーぞ！」

「」「」「ウハハハw」「」「」

「おい、レン。お前は修行先どこがいいんだ？どっか希望とかあるのか？」

「えー オレっすか？そうだなーきつくなって楽しそうなところだったらどこでもいいっすけど」

「さすがレンWやる気ねーな。お前よく卒業できたって！」

「いえてる。いえてる。」

「マジ先輩たち失礼だしWオレだってやるときやりますって」

「ごめん！それ想像できねーわ」

「ひでー秒殺かよっ さすがのレンでもそれは可哀想だぞw」

「お、レンの浮かび上がってきたな。どこだ？どこだ？」

「あー 本当っすね。えーっとなになに……。」

「「「「「はぁ！？麻帆良学園で教師！？」」「」「」「」

「え、マジ……？」

作られた道筋。それは英雄への大いなる一歩なのか、それとも道化への道なのか…。

※1 校長先生よく実の御爺ちゃんつて設定にされてますが公式じゃないですよね？

※2 これってアンチにはいるのでしょうか？

※3 先生の言うことをよく聞く優等生は卒業したら忘れちゃうけど、手をかけさせる問題児のほうがよく記憶に残るって先生が言ってた。ソースはオレ。

嵐の後で（後書き）

妄想が続いてるうちに2話目投稿。

正直人名とか地名とかさっぱりです。

wikiとかもつかい読み直すか…。

麻帆良の地

「…ないわー」

「いや、でもこの修行地を決めてるのって強力な神秘が内包された特別な魔法道具を使用して決められるんだろ？ たしか」

「って話しは聞くよな？ 本人の資質を見極め達成できるかどうかのギリギリを見極められるって噂は有名だ」

「いやいや、オレ数えて10歳っすよ？ ここまでされると正直引きますわー」

「レンはこれ、魔法的なことで決められたんじゃなく、政治的なことで決められたって思うのか？」

「先輩がたがオレの立場ってか立ちいち？ に立ったたとして考えてくださいよ…冷静に考えて」

「「「……………」」」

「ひ、ひていは出来ない、かなっ!？」

おいコラ先輩がたよお、いっせいに目をそらしてくれるな。

うーん これ先生じゃなくて生徒、っていうならなくもない、かなと思うんだけど変更ってできねーのか？てか先輩のも浮かび上がってきてるな。どれどれ。

「あ、いいな先輩魔法世界でキャラバンの手伝いつてでてる！」

「お、本当だ！…レンの後でこの修行先見るとすごくいいところ思えてくるなw」

「お前実感こもりすぎっw」

「ひっ レンの目が獲物を狙う野獣の目にっ」

「か、わかれねーよっ これは俺の修行先だ（汗）」

「ちっ！」

くそっ 獲物に逃げられたか。はくじょうな先輩たちだぜ。

可愛い後輩を見捨ててさっさとずらかるなんて。

しょうがねえな、校長先生に直談判にいつてみるか。

道中、まるでモーゼが海を割ったように、人がさっとわきにそれていく。

むう獲物を狙う野獣の目ってやつの効果か？

移動を邪魔されないし便利っちゃ便利だがそんなに威圧感あるか？

「たのもー！」

あえて派手な音を立てつつドアをあける。むろんノックという紳士のマナーは忘れない。

返事を聞かないであけるあたりマナーは守れていないが、もちろんワザとだ。

「む、レン。おぬしも修行地のことで問答があるのか？」

おお？　なんか先客がいるぞ。しかもネギ兄さんにネカネ姉さん、アーニヤの3人だ。

しかもネカネ姉さん気絶してるし…こりゃよっぽどネギ兄さんの修行地がとんでもないとこだったんだな。

「たりめーっしょ！　オレ数えて10歳なんですよ？　さすがに教師とかないわー」

「えっ？ レンも修行先で教師なの？」

不思議そうな顔で問いかけてくるネギ兄さん…。

おいおいおい、まさか、だよな？ 兄さんの返答しだいでは政治的
くってのが確定するぞ。

「まさか、とは思うけど…、兄さんの修行先って麻帆良学園？」

「う、ん…。もしかしてレンも同じところで同じ教師なの？」

はい、確定しましたー。どんだけ茶番なんすか。修行地ってそー
ゆーので決めちゃいかんでしょー！

校長先生、なんか言い訳あるなら聞きますけど？

「…うむ。実はのう…ネギ君、レン君。君達二人は英雄の候補なの
じゃよ」※1

なんつーか、驚いた。校長先生に驚かされるのは3度目だが今日
ほど驚いたことはないぜ。

まさかぶっちゃけられるとは夢にも思わなかった。正直舐めてま

した。ごめんなさい！

「英雄候補、ですか？それってつまり…」

「うむ！つまるところ立派な魔法使いの候補でもある。」

「っ！」

おーおーネギ兄さんが近年まれに見るめっちゃいい笑顔です。

いやーバカにするわけじゃないけど、英雄ってならせてもらうものじゃなく、結果としてなってしまいうもの、じゃないの？

人工的に作成された英雄は英雄たりえるのか、とちょっとシリアスに決めてみるけど…

ハハハ。やっぱ誰もオレのこと見てねーよW今のは将来黒歴史として思い出したら悶絶しそうだからなかったことにしてくれっ！

「スプリングフィールドの双子がそろって麻帆良という魔法世界からの干渉の少ない土地にいく、っていうのが重要ってことですか？」

「そういうことじゃ。たしかに政治的な判断で君達には麻帆良へと行ってもらうことになるが、長期的にみればそれがもっともあらゆる勢力の思惑から君達を守る、と考えた」

肝心のその麻帆良の地でなんらかの政治的影響をうけるとは考えなかったのか？

いや、それもこうりよしたうえで麻帆良からの影響ならば問題なしと判断されたと考えるほうが妥当か。

「やっぱり拒否権はないんですね？念のために聞くんですけど…」

「とーぜんあるはずがないじゃろう。立派な魔法使いになりたくはないのか？」

ないっす。と答えるのは簡単だが、ネギ兄さんといつの間にか復活したネカネ姉さんの視線が怖い。

見事に無表情でじーっとこっちを見つめてる。

「…麻帆良行きは確定として、教師じゃなくて小学生？とかいうのじゃ駄目ですか？」

「駄目じゃ。先方は教師として君達を欲しがっておる」

「何度も言いますがオレたち10歳っすよ？」

「レンボクなら、ボクたちなら大丈夫だよ！きつと立派に教師をこなせる！」

お兄様…教師って仕事どんなのだか知ってるんですか？

修行地が別なため面白くなさそうにしつつも話しには入ってこなかったアーニヤがオレをにらみ始めた。

はいはい。ネギ兄さんの邪魔はするなってことね。

「わかったよ。兄さん、オレきつと迷惑かけちゃうと思うけどよろしくね？」

「うんっ！大丈夫、ボクはお兄ちゃんなんだから。まかしといてよ！」

よし、言質はとった。オレは座学がさっぱりだから教師はムリ！と現地についたらゴリ押そう。

あとは全部兄さんにまかせればいいやw

麻帆良か…どんなところなんだろう。不安半分、楽しみ半分ってことかな。

※1 戦争での英雄って実は大量殺人者ですよ…。一人殺せば犯罪者だけど、数千人殺せば英雄って。

年端もいかない少年にお前は将来英雄になるんだよ！って考えてみるとすごく怖い教育ですよ。

麻帆良の地（後書き）

アドバイスありがとうございます。

指摘されたところ意識してみました。

文字数も減らしてみたんですが…今度は少なすぎる!？

さじ加減むずかしいですね。

他の人のを読んで参考に見ようかしら？

真帆良の地2

やってきました麻帆良学園。パンフレットを読むと、複数の学術機関が集まり都市を形成している、とある。

パンフレットには書いていないが、この学園都市というのは表の姿。

実は現実世界における西洋魔法使いたちの活動の拠点となる関東魔法協会という組織なのである。

なんでこんな極東に魔法使いの拠点があるのか疑問だったが、あの木を見れば納得だ。

麻帆良学園中央駅を出てまず目にはいつてきたのが、遠目にもはつきりとわかる巨大な木。

…ここからだいぶ距離ありそうなのに、それでもでかいな。
しかも内包している魔力がこれまたメチャクチャにデケエ。

オレも兄さんも人と比べるのがバカらしいくらいの魔力量を誇るが、あの木と比べると人間ってちっぽけな存在だと痛感させられる。

あの木の魔力でこちら一帯が第一級の霊地になってるのか。神秘にたずさわる者なら誰もがこの地を欲しがると思うけど、関東魔法協会たちあげるときに土着の魔法使いともめなかったのか？

結局この真帆良は西洋魔法使いの拠点になっちゃってること考えればもめてたとしても強引に奪っちゃったとか…？※1

真帆良の敷地内に入った瞬間に違和感を感じる。んーこの感じは

なんかの結界か？違和感はあるけど、イヤな感じはしないし…、まあいつか。実害なさそうだしな。

にしても広いなあ、登校中らしき生徒の数もまばらなので、よけいに広く感じるな。

そろそろ学校はじまる時間なのに見かける生徒が少ないってことは不真面目な生徒は少ないのかな。

修行先の学校もそういう子たちばかりなら楽そうだなー。

えーと、駅前広場公園の噴水のところで待ってれば案内の人がいるんだったか。

校長先生に何度聞いてもパンフレットと待ち合わせの場所しか教えてくれねーんだもんな。

先入観を持たずに自分の目でみて判断するがよい、って教えるの面倒なだけだったんじゃないかと思ってしまうのはしかたないと思う。

兄さんも兄さんで、日本へは一緒に行こうと誘おうとしても日本語覚えるの忙しいから後にして！ってとりあってくれなかったし。結局一人でここまでできたぜ。

噴水のところには二人の女の子が立っている。案内ってのはあの二人のことかな？待ち合わせの時間まであと10分もあるけど、他に立ってるひとはいなしな。

「あの一、案内の人ってあなたたちですか？」

「わわっ！外人の子が急に話しかけてきたっ！？えっと、私は英語が話せませんってなんていうんだっけ？」

「あー、君が待ち合わせのスプリングフィールド君？ちっちゃい子やったんやなー。二人って話やったけど、一人なん？」

「えっと、オレ日本語話してるつもりですけど、なんか変ですか？ちなみにその様子だと兄さんはまだ来てないみたいですね」

オレの日本語の教師は日本アニメだったが、やっぱりちゃんとした日本語じゃないのかっ！？

なんとなく顔立ちがネカネ姉さんに似ている金髪ツインテールの女の子と、みごとに黒髪ストレートを持つ清楚なお嬢様風な女の子。前者は見るからにアホっぽいけど、後者は話を通じてるみたいだな。

「君の日本語ちゃんとお通じてるえ。上手いもんや。もう一人の子はまだなんかあゝ。君の方が弟ってことは君がレン君なん？」

「よかった！ありがとうございます。オレがレンですけど、兄さんとはあいにく一緒にはこなったもので…」

「うう、そうよこの子ちゃんと日本語話してるじゃない…違うの！急に話しかけられたからびっくりしたただけで、私べつに頭が残念な子なわけじゃないのよ？」

いかんいかん。目つきが明らかに残念な子を見る目になってたか。初対面なんだから気をつけておかないとな。人間関係は第一印象できまるっていうし。

にしても兄さんはまだ来てないのか。真面目なだけあって、時間にルーズなはずはなかったとは思うんだけど。

お互いに自己紹介を終え、兄さんを待つ間の世間話としてこの真帆良学園都市のことを聞かせてもらった。やっぱ魔法使いの作った都市だけあってとんでもなさそうなところだなここ。

「にしてももう一人の子遅いわね、そろそろ名物のアレが始まるわよ？」

「名物のアレ？」

「たしかにそろそろやな。ここじゃ危ないからそっちのベンチに避難しとこか。レン君がいるからネギ君が来てもすぐわかるやろ」

「そうね。それじゃベンチで座って待ってましょっか。名物になるくらいだからね、すごいわよ！」

そう言うとそのくさとベンチへと向かう二人。いったいなにがはじまるんだ？

これは…現実なのか？ドドドド、と地響きが聞こえたとおもったら、駅の方角から人々人々。

人の群れが一心不乱に走っている。いや、よく見るとバイクのつたり、インラインスケートやスケボーなど色々な道具を使用している者もいるが、なんというか圧巻だ。なんちゅー人の数だ。

「…なんスか？これ…。」

いや、なんとなくわかるけど！なんとなくってか明らかにこれ遅刻しそうになった人たちが急いでますー！って状況だよな？にしてもこの数は…。やんちゃな生徒が多そうで楽しい修行になりそうだなー、と喜ぶべきなのか？

オレも確かに真面目とはいえない生徒だったが、余裕をもって行動するってのがモットーだったので、遅刻なんざしたことはない。遅刻しそう！とせっぱつまらくらいならもっと早く起きるとかすりゃあいいのにな。理解できんな。※2

あ、群集の中を駆け抜ける小さなお子様発見！お前はどこの超人か？あきらかに10歳児の動きじゃねーぞ兄様…。常日頃から魔力で身体強化してるらしいからなー無自覚でやってるのか？

「あ、もしかしてそこでピョンピョン飛び跳ねてる子がネギ？子供なのにすんごい動きねー」

「ほんまやー。すごいな。おい、ネギくん！こっちや！」

…ノーコメントでお願いします。

おはよう兄さん。遅かったね。空港とか駅で迷った？まあ人多かったもんね。

オレ？駅員とか人に道聞いたりして問題なかったけど。えー、一人でなんでも出来るようにならないといけないって？まだオレら10歳児っすよ、それかなりムリが…。あーはいはい。それじゃ修行になりませんよねー。ごめんなさいね。（ネギ兄さんのウザさがここにきて跳ね上がったな…兄さんのテンションが上がれば上がるほどオレのやる気が下がっていくヨ…）

あ、紹介するね。この二人が案内してくれる神楽坂明日菜さんと近衛木乃香さんです。んでこっちがネギ兄さんです。ところで案内ってどこに案内してくれるんですか？

「たしかにどこに案内するのか言ってなかったわね。あんたたちを学園長室まで案内するのが私たちの仕事なのよ」

「それじゃ案内するえー。はぐれないようにちゃんとついてきてな？」

お願いします。

はっきり言おう！道中地獄でした。オレはガクガクブルブルと震えて嵐が過ぎるのをただただ待つしかなかった…。

ことの発端はネギ兄さんの、お近づきのしるしに占いで運勢を見てあげましようという一言だった。

まずは神楽坂の運勢を、となにやらムニャムニャと占いはじめてネギ兄さん。

その後の一言で地獄の折檻という名の固有結界が展開された。

「失恋の相が出ています！」

神楽坂さんの右手がぶれた、と思った瞬間ネギ兄さんの頭に！

アイアンクローというものをご存知だろうか…？

手で相手の顔面をつかみ、指先の握力で締め上げるプロレスで使われる技なのだが、女子中学生の細腕で10歳児を持ち上げ、かつアイアンクローをかけるなんてどんな力持ちなの！？

般若の形相でギリギリと音をたてつつアイアンクローをかける神楽坂さん。

苦悶の表情でなんとか逃れようとするネギ兄さん。

つねに魔力で身体強化している兄さんのスペックは一般成人男性にあてはめると超一流のアスリートに匹敵する。常識的に考えて女子中学生のアイアンクローごときで一方的にやられるはずがない。

神楽坂さんばねーっス！あんた本当に人間かよ。

「あ、ん、た、ねえええ！ 私に失恋の相が出てるってえ？ いい加減なこと言うと許さないんだからねええ！」

反論しようとなんとか口を開こうとするネギ兄さん。しかしその口から出るのは苦痛にもだえる悲鳴のみなのでした。目には涙を浮かべ、逃れようと必死に浮いた両足をバタバタさせています。

はたから見てもネギ兄さんの抵抗を神楽坂さんは苦にしていません。

もう一度いいます。今のネギ兄さんの身体スペックは一般男性にかんがみると超一流のアスリートなみなはずなんです！

ごめんネギ兄さん……。オレ、助けてあげることができないよ。だって膝が笑って腰ぬかしちゃいそうなんだもん。こえーって。

なんとか止めてもらおうと近衛さんの方をむくと、どーしたん？ ってにこやかに笑い返されちゃいました。

今、体の震えを止める術をオレは知らない。この女子中学生二人は人間の皮をかぶった悪魔か？

誰でもいい、誰でもいいのでこの空間からオレを救いだしてくれ！

※1 崇めてた御神木がはえてる聖地を、「ここいい土地じゃんw
今日からオレらが使うからお前らどっかいけよwww」とかされる
と東洋魔法使い達キレてもしかたないと思う。

※2 田舎育ちなので、スロースタイルに生きています。本人が思う
ほど余裕をもって行動できているわけではないのですが、基本オレ
ルールで生きている人間なので勘違いしてるっぽいです。

真帆良の地2（後書き）

神楽坂の姐さんまじばねーっす！

なんか設定ミスって完結済みになってしまってたみたいです。
連載中になおしておきましたすいません。

救世主爆誕

「なにごとだい？」

「た、高畑先生！？ 違うんですっ、これはその…とにかく違うんですっ！」

「ふえええーん、タカミチィィー（涙）」

メシア降臨キター！ タツカミチィっ あんた最高の漢だよっ！

タカミチの出現で神楽坂さんが固有結界…地獄の折檻を維持できなくなったようで、書き換えられていた世界が本来のものに戻った。

あの空間で彼女の怒りを受けた者は、世界の主である彼女の魔の手から消して逃れることができないようだ。「すでに折檻されている」という因果を無視した恐ろしいほどの神秘がこめられている空想具現化魔法。

一見して見たところ彼女たちは一般人のようだが、たんに魔力を封印されているだけなのか？

本気で怖かったよう。村でもメルディアナ魔法学校でもオレたち以上の魔力をもった人間はいなかった。

今じゃ村が襲われた時のように悪魔の軍勢におそわれても笑って切り抜けられる自信があったのに。

これが日本のことわざにある井の中の蛙、大海を知らずってやつなのか。世界は広い。

痛みと恐怖から解放されたネギさんとオレは（オレは痛みはなかったが）現世に降臨したメシア、タカミチ・T・高畑の胸に飛び込んだ。

可愛がっているネギと、なつかない猫のようだったオレまでもが抱きついたもんだからタカミチは嬉しさと困惑がまざった顔でたずねる。

「遅いと思って迎えにきたんだけどネギ君は泣いているし、なにがあっただい？」

「そ、それはそのう…えええつと…」

「いやゝネギ君がな？アスナのこと占ってくれたんやけど、失恋の相が出てるってはっきり言ってしまったんよ」

しどろもどろになる神楽坂さんに近衛さんが助け船をだす。

「そうか。アスナ君も災難だったね」

「い、いえっそんな。わ、わたしもちょっと大人気なかったかなっ

て反省してます！」

苦笑するタカミチに先ほどまでとは正反対に乙女のような反応をする神楽坂さん。

「さあ、学園長がお待ちだ。ネギ君もいつまでも泣いてないで、男の子だろ？」

「う、うん。タカミチ、ボク頑張るよ！」

おんぶお化けのように背中にひつつくオレと泣き止んだネギの手を引いて先導するタカミチに、そのあとをついていく女子中学生ふたり。…シニールだ。

「失礼します、学園長。ネギ君とレン君を連れてきました。」

「おお！待ってあったぞ。君たちがネギ・スプリングフィールド君にレン・スプリングフィールド君か。コノカにアスナちゃん、二人ともご苦労じゃったの。」

「お安い御用やー。」

「いえっ遅れてしまつてごめんなさい。」

「うむうむ。さて、ネギ君にレン君。ワシが真帆良学園の学園長の近衛近右衛門じゃ。

理事会の理事長も兼任しておる。うーむそれにしても二人とも父親にそっくりじゃな。

いい面構えをしとる。」

「え、本当ですかっ？」

父さんに似ていると言われ笑顔になるネギ兄さん。

「うむ。本当じゃとも！二人にはこれからこの学園で教師として働いてもらうことに「えええええー！本当ですか学園長！？こんなガ、もとい子供が先生ですってー！？」なるんじゃがアスナちゃん、何か問題でもあるのかのう？」

「問題大有りですよ！こんな子供じゃちゃんと教師なんてできっこありません！」

「ほっほっほ。それなら問題ないんじゃない。二人とも優秀での、すでに大学レベルの学習は終えておる。彼らが卒業した学校は世界的に見ても名門なところでの、その学校の校長からも太鼓判を押されておる」

「そ、そんなあ」

「まあそういうことじゃ。ネギ君、レン君。修行はとても厳しいものとなる！ かつ教師というのは並大抵の仕事ではない。二人ともこの試練を乗り越えられるだけの自信はあるかの？」

「はいっ！ がんばります！」

「ええ、まあ。ほどほどにがんばりまーす」

やる気に満ちた兄さんとやる気なさそうなオレを見比べた学園長だがひとつうなずくと、話題をかえてきた。

「そういえばじゃのう、実はまだ二人が住む場所が決まっていらないのじゃ。教員専用の寮は満室じゃしの。

おお！ そうじゃ！ コノカとアスナちゃんの所にいっしょに住む、というのはどうじゃろうか？」

「ちょ、なに考えてるんですかつ学園長！私そんなの断固反対です！」

「ええよ。二人とも可愛いし面白そうやん。」

「ええっ！なに言ってるのよコノカ！」

「うむ！決まりじゃな。」

「ま、まってください！…そうよ！二人もじゃ狭くなりすぎちゃうから一人だけ預かります！」

「ふむ、それもそうじゃな。ではもう一人は別の子の部屋にお願いするかの」

「っ！それならせっちゃんのとこがいいと思うえ。私たちの部屋からも近いし。」

「そうね！それがいいわ。よし、それじゃ私達の部屋であずかるのは弟のレンのほ「ではレン君はセツナ君の部屋で住んでもらうことにするかの」うに、って…うううなんで失礼なガキのほうなのよ（涙）」

展開が早すぎてついていけないが、どうやらオレたち双子は女子寮の生徒たちの部屋にそれぞれ住まわされるようだ。

まあ10歳児だからな：女子寮でもギリギリOKなのか？でも教師になるんだろ？いいのか？

「それではコノカにアスナちゃんは二人をむかい入れることをセツナ君と、同室の龍宮君に伝えておいてくれるかの？
ああネギ君にレン君はまだ話があるので残っていてよろしい。」

「わかったえ〜」

「うう。わかりました」

学園長室から退出する二人。ネギ兄さんとオレは残されたが、どんな話があるんだろうか。

「二人に残ってもらったのは魔法に関することを説明するためじゃ。二人はこの真帆良学園都市に関東魔法協会があるのは知っておるかな？

ゆえにこの都市にはかなりの数の魔法使いたちがおるのじゃ。彼らは魔法を使い、さまざまな人々を助けておる。

むろんそれはこの都市内だけではなくその活動は海外やこの現実世界を飛び越え魔法世界にまでおよんでおる。

そこにいる高畑先生もNGO団体の悠久の風に所属し、出張という名目で活動しておるのじゃ」

「ではボクたちもそういった活動ができるんですね!？」

キラキラした眼差しで学園長につめよるネギ兄さん。テンションたけーな。

てかボクたち、ってオレもふくまれてるのか?オレ面倒くさいことはノーセンキューなんだけど…。

「うむうむ。意欲があるのはよいことじゃネギ君。しかし君達にはまずは教師としての仕事をまっとうしてもらいたい。」

兄様：そんなあからさまにテンション落とさないでっ。学園長もタカミチも苦笑してるから。

「先ほども言ったが、教師という仕事はなみたいのものではないのじゃ。

何十人も生徒たちを教え、導くというのは片手間で出来るものではない。

同じように教師についている魔法使いも何人もいるが、そうした魔法先生たちはみな教師としての仕事が一人前にできるようになってから魔法使いの仕事をすることを許しておる。

焦るでないぞネギ君。むしろ君達に教師という大役をしてもらうの

は我々の君達に対する期待のあらわれじゃ」※1

「…っはい！精一杯頑張ります！」

おおゝさすが学園長。上手いこと兄さんのやる気をみなぎらせている。…みなぎらせすぎるような気もしないではないが。

つーかこのままじゃオレまで教師役をやらされちまうことになる。ここでひとつビシッと言ってやらないとな！

「あのゝ学園長、ちよつといいつすか？」

「ふお？なんじゃいレン君なにか質問があるのかの？」

「いやゝオレたちにそんなに期待してくてるのはありがたいんスけど、兄さんとはともかくオレが教師やるってのはちよつとまずいんじゃないとか…」

「ふむ、それはまたどうゆうことじゃ？」

「オレの成績しってます？座学なんか正直さっぱりだったんですが、たしかに単位はすべて修得してますが備考のところになんかただしこれは特例によるくって書かれてませんでしたか？」

「お？ おお？ ちょっと待ってくれんかレン君。資料、資料は、と…」

おおお。どうやら真帆良側はオレの成績表は受け取っていても内情までは把握してなかったみたいだな。…これなら教師は免除で学生として学園内の小学校に生徒として通う、ということに――――

「うむ、たしかに備考欄にそう書いてあるの…よし！ ではネギ君を英語担当のうえクラス担任とし、そのサポート役ということでレン君には授業の補佐と副担任をやってもらうことにしようかの！」

――はならなかったようです（涙）

「ええー！ ぶっちゃけオレ生徒たちに教えられるような知識ねーっすよ！？」

「問題なしじゃ。英語なんぞ君たちの母国語じゃろ？ ペラペラなんじゃから君は彼女たちに聞かれたことを答えたり、ネギ君のサポートにっしてくれればよいよ」

こ、この爺、なんかメルディアナ魔法学校の校長先生に通じる胡散臭さを感じる！

こいつら実は親友でネギ兄さんもろともオレを巻きこむつもりじ

やないだろうな？

「いや、やっぱりオレには教師なんて荷が重いっスよ！どこかの小学校とかに生徒として魔法の修行をしたほうがいいんじゃないかと！」

「レン！往生際が悪いよ！学園長先生がおっしゃってただろ？みんなボクたちに期待してくれているって！その期待を裏切るつもりなの？」

ぐう、このクソ兄貴。オレの逃げ道をふさぐつもりかっ！？

責めるような眼差しの兄さんに面白いものをみるような学園長、苦笑しつつも期待のこもった目でみてくるタカミチ。

「…ガンバラセテイタダキマス」

戦争は数だよ兄貴！…ですよー。へへ、負けたよ数の暴力に負けちゃったよ（涙）

※1 きつと他の魔法先生も最初から教師と魔法使いとして両立なんてできなさそうですよね。

いくらベテラン魔法使いとはいえ教師の仕事も一緒に頑張っ
てね！とかいわれてすぐできるような人はいねーっしょ。それこそ立派な魔法使いクラスの逸材ならまだしも。

あ、ちなみに魔法の秘匿とかは魔法使いの常識なんで、学園長が念を押して教えるまでもなく普通は魔法学校や親など年長の者が徹底して教え込むはず！という設定です。

救世主爆誕（後書き）

爺さんの話が長いこと長いこと。

この後人外魔境の3－Aの生徒達が出てくる予定なんです、正直彼女たちのキャラすべて把握してないんですよね。みんなどんな口調でしゃべるんだろ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4517p/>

雷の兄さんと風の弟（転生）

2010年12月13日21時20分発行